

雲 南 紀 行

泉 武夫

紙数に限りがある制約下ではあるが、雲南を訪れた個人史の痕跡を留めるべく一文を寄稿する次第である。

私が参加出来た限りでのこれまでの社会科学研究所の中国視察旅行は、北京、天津、上海、蘇州、大連、青島といった、どちらかといえば経済開発区に属する沿海部の都市部に限られてきた。かつてから日本米DNAの古里である雲南の地は是非訪れたいと思っていたので、今回の視察旅行で念願が実現できた。ところが、テレビでインプットされている西部の荒涼とした様相や少数民族が山道に行く図とは違って、訪問した麗江にしる昆明にしる大都市であり、綺麗に整備された近代都市であった。奥地の山間部に踏み込めば事態はまた別の様相を呈するのだろうが。しかし、雲南の印象を総じて言えば、昨年暮れに訪れた、雲南と国境を接するベトナムと共通する、なにかほっとする癒しを感じたということであろうか。これは既に日本では失われてしまったものである。

麗江は1995年に地震の被害を受けた跡は綺麗な街に再建されている。昆明も都市改造がなされたようで、近代的なビルやマンションが建ち、街路を花壇が飾る緑多い都市であった。ただ、朝の通勤時の自転車の列と、オリンピック開催のために北京や上海では禁止されたという街路で家族が夕食に興じる風景が懐かしかった（オリンピック開催のために北京や上海では禁止されてレストランに代わったという）。

両都市とも、3月中旬という時期にも関わらず、実に温暖な気候であった。1月に昆明でも雪が降ったと聞かされていたので、ある程度の寒さは覚悟していたが、コートが必要としない暖かさであった。表敬訪問した昆明市の副市長は夏にもう一度来てみなさいと言っていたが、夏には逆に涼しくて凌ぎやすいのだということを行きの平尾教授に教わった。昆明を春城と愛称しているのが納得できた。

政府の大号令の下、現在、西部大開発計画が進められており、実際、昆明経済技術開発区も実現されているが、沿海部の開発と同様の成果を上げられるか、多少疑問に思われた。素人目にも、交通インフラが死命を制することになるだろうことは予想される。

昆明国家経済技術開発区の方の話によると、雲南を中国の対東南アジア関係上重要拠点として位置づけ、昆明市とベトナム、タイ、マレーシア、ラオスを結びつけた一大流通網を構築する将来構想が練られているという。実際に、昆明とラオス間的高速道路建設、雲南とミャンマー間の開発計画が進行中であるらしい。陸上輸送よりは、沿海諸都市からの海上アクセスが主流

になるのではないかと懸念されるが、この将来構想が実現されるならば、北東アジア経済圏ないしは東アジア経済圏とはひと味違った経済圏が、インドネシアも巻き込む形で構想されるかもしれない。

同開発区の方の話では、雲南の産業として考えられるのはタバコ産業、遊悠産業、生物産業、情報・IT産業、機電産業があるという。既に巻タバコでは玉溪紅塔烟草公司の「紅塔山」の名で知られ、雲南最大の産業となっている。遊悠産業とは観光産業のことであろうから、これも大理、麗江、石林等観光立地にはこと欠かないであろう。現に観光目的で多くの日本人が雲南を訪れている。問題は残る三つの産業ということになる。情報・IT産業や機電産業は飛行機輸送が可能なものならば、道も開けようが、同産業に関してアジア諸国からも遅れていると思われる雲南が、人材育成をも含めて、キャッチアップするのは容易なことではないかも知れない。生物産業で何を特定しているかは定かではないが、雲南大学経済学院副院長の張教授が、綿花と石油の産地である新疆地区を白と黒の経済と呼び、雲南を緑色経済と呼んでいることからすると、野菜、穀物、花卉、フルーツ等を想定してもよいであろう。中国を北部の麦作、南部の水稻と大きく分けるならば、雲南はまた独特の役割を担うことが可能になるかも知れない。

上海から昆明空港で乗り継いで麗江空港に降りるまでに飛行機から目撃されるのは、赤茶けた山肌を頂上まで上り詰める段々畑の列であり、谷間一面を菜の花畑が黄色に彩る光景である。菜の花の合間に四角く黒ずむ水田が散見される。麗江郊外の万年雪を戴く玉嶺雪山の麓では荒起こしをした畑（田か）に続いて、青い麦畑が広がり、さらに白い小花と緑のコントラストの鮮やかな畑地が広がる。日本でいえば蕎麦畑を連想させるが、レンゲ草のように肥料として鋤込むためのマメ科の草かも知れない。高台から谷間を眺めると、緑と土色のモザイク模様が対



写真 1

岸の山裾まで広がる(写真1)。緑色の区画にしろ土色の区画にしろ、さほど広い面積を持っているとは思えない。むしろ狭い印象を受ける。

麗江郊外の納西族の農村を訪れ一軒の農家を訪問することができた。小川を渡った村の入り口に、5,6個の穴を穿った板状の木が10本ほど建てられている。これは穴に棧を通して収穫した農産物を干すための道具だという。かつての日本の農村でも刈り取った稲や麦を干すために棧を組み立てたのと同じことだろう。村落は塙も家屋も日干し煉瓦で出来ている。屋根は全て瓦葺き。敷地内には藁塚が見られ、刈り取ったあとのトウモロコシの茎が無造作に積み上げられ、側で牛が寝そべっている。ある農家の中庭ではピリアード台があって、二人の子供達が玉突きをしている。庭を覗いたら驚いて家の中に隠れてしまった。院生の施女史の話だと、一人っ子政策は漢族に対してで、少数民族は二人っ子が認められているという。2軒の藍染め屋があり、藍ガメがむき出しになっている。日本ではカメは土中に埋め込まれているが、それだけこちらは気温が一定しているということであろうか。リヤカーに積まれた白い南京袋が集荷場とおぼしき場所に4袋ほど見られたが、中身は不明である。また「交換所」と書かれた店があり、「根物交換参考表」と書かれた紙が貼ってある。白花生、紅花生、豆腐皮、糯米、糯メン(麵という字ではなく、米偏に旁が面という字。これは雲南の名物らしく、昆明のホテルや食堂で食したが、沖縄の麵に似ている。)等の字が読みとれる。自家用の余剰農産物を換金するのか、物々交換かは定かではない。あるいは、商店を見かけなかったので、これらの商品を商う店なのかもしれない。道ばたに南京袋があり、「引選日本技術」と書かれている。その他に「素」という字も見られ、「40%以上」という数字も見られることから判断すると窒素肥料と思われる。

訪問した農家は門をくぐると中庭があり、回りを家が囲んでいる。門をくぐった正面の建物の軒先にトウモロコシが一杯干してある。粉にして食糧にするのか、播種用かは不明。庭には一本の鉢植えの木にはピンクと白い花が咲いている。夫婦が菓子を出してもてなしてくれた。台所とおぼしき建物には小型のガスボンベが外から見える。庭の奥には豚小屋があり、トウモロコシの茎が敷き詰められて中型の豚が一頭飼育されている。日本の豚小屋のような臭いもなく清潔であった。みんな色々質問していたがあまり要領を得なかったのが残念であった。

昆明から石林県に向かう途中でも農村風景を見ることができた。農民が小さな短冊状の田圃を整地している光景が見られる。その多くはビニールフィルムで覆われている。苗代と思われる(写真2)。雲南の稲作は1年1作で、3月中下旬に苗代播種し、5月上中旬に田植えし、180日の長い生育期間を経て、9月下旬から10月中旬にかけて収穫すると言われる。夏期の稲作と冬期の菜種・トウモロコシ・小麦等の二毛作となっているようだ(注1)。沿道には黄色く色づきかかった菜種畑が散見され、菜種の収穫が近いことを思わせ、昆明と麗江の季節感の差を示している。また蔬菜畑と思われる畑も散らばっており青菜が植えられている。雲南は南京豆の

産地でもあるが、そうとおぼしき菜が密植されている。帰国後雲南ではエンドウ豆の若芽を蔬菜として食すると雑誌で知ったが、あるいはその類のものかもしれない。とにかく「雲南は植物資源の宝庫」(注2)と言われるように、食卓には豊富な蔬菜料理が供された。そして1区画の畑地は驚くほど小さい。

1戸当たり平均耕地面積が中国全国で0.15ヘクタールなのに対して雲南省の耕地面積は0.25ヘクタール、石林県は0.35ヘクタール(注3)となっているので、中国の平均よりはかなり高いが、それでも1戸当たりの耕地面積が狭隘であることには変わりはない。まさにアジア的な零細農耕を示している。しかも、これらの耕地は、一部の農家では20余箇所にも分散し、まとまっているものでも2~3箇所に分かれていると言われる(注4)。これまた分散錯圃制を地で行くようなものである。零細農耕に分散錯圃制！これは隣のベトナムでも同じであり、かつての日本でもそうであったことは記憶に新しいところである。

しかも、人民公社による農業集団化の失敗を経て(制度としての人民公社は1983年に消滅)、中国では農村改革の突破口として各戸による農業生産請負制が導入され、農民は単なる労働者から意思決定を伴う経営者に変身し、農業生産性が集団化時代を大きく上回って、食糧の画期的増産が達成されたと言われる(注5)。ところが、中国では、家族の人口数で土地を均分する均田制がとられたために、耕地が細分化されてしまい、これの弊害を改善し、土地使用権の流動化と土地の相対的集中を促進する目的で、均田制に代わって、農家自家消費の食糧を生産する口糧田と供出義務を負う責任田の両田制が導入されるが、これも大きな成果を生みだしてはいないと言われる(注6)。

1980~1994年間の30の省別農村総生産額の成長率を見ると、安徽省と四川省を除き、全国



写真2

平均 15.2%を上回ったのは全て沿海地域の省で、内陸各省は殆ど全国平均を下回っている。特に雲南省は 10.3%でチベット、青海、貴州、寧夏、黒竜江に次いで下位から 6 番目に位置している（注 7）。先の張教授の、一人当たり GDP は中国全国平均 960 ドル、西部 700 ドル、上海 5000 ドル、昆明 2000 ドル、雲南省 500 ドルという指摘からしても、沿海部と内陸部特に西部、都市部と農村部の格差は無視しがたいものがあるといえるであろう。そんななかで、先の 1980～1994 年間の一人当たり農民所得の成長率は、全国平均 6.5%に対して、雲南省は 5.1%で 30 省中上位から 16 番目、下位から 10 番目の位置にある（注 8）。低いとはいえ全国平均との差が縮まっていると言えないだろうか。

昆明郊外に桃源郷を見た。沿道から谷を下って向こうの山の中腹まで、ピンクや白や黄色い花を付けた樹木の林がある。遠くの方は霧って定かではない。桃源郷とは誇張ではない。これらは桃、スモモ、リンゴ、ナシ（西洋ナシ）の樹木と想像された。ただし日本の果樹のように手入れされているようには見えない。麗江のホテルではリンゴがサービスとして部屋に置いてあったし（日本のリンゴとは比肩すべくもないが）昆明でも食卓に西洋ナシ風のフルーツが出された。前回中国を訪問したときには見事なイチゴや西瓜が食卓に供されるのが常態化していたので、いずれ他のフルーツもそうなることであろう。

昆明で触れなければならないのは、ある人が「ビニールの海」と表現した広大なビニールハウスの群である（注 9）。昆明空港に下りる直前に？池湖畔にびっしりと並ぶビニールハウスが目を見く。沿道から見ると、三角屋根の温室と半円屋根の温室が軒を連ねている。これらは雲南特産の花弁栽培のハウスであろう。当地で花卉栽培が本格的になってまだ 10 年に満たないという（注 10）。雲南省の切り花の栽培面積は 1998 年には 18,480 ムー（1,231 ヘクタール）、生産額は 2.7 億元に達し、1994 年以来、雲南省の花弁生産は中国で第一となり、50%以上の市場シェアを占め、現在 256 の企業と 1 万戸以上の農家が花弁生産に従事しているという（注 11）。雲南航空会社が雲南産花弁の空輸量の 80%を占めており、雲南花弁産業連合会は中国各地に 1998 年には 9,890 トンの出荷を実現させ、しかも季節変動はなく年間を通じて出荷しているという（注 12）。この花弁生産はかつて昆明で開催された世界フラワー・フェスティバルに大きく刺激されたものであろう。昆明市の大通りを飾る花壇の列の花もこれらのビニールハウスで栽培されたもので、特に上海郊外で大規模な園芸農場を持つ日系アメリカ人の中美合資教大農場が花博に向けて開設した昆明農場がそれらを供給しているという（注 13）。これらの花弁類はいずれ日本にも大量に押し寄せてくるであろうことは確実であろう。

また、昆明には大規模な「雲南民族村」がある（写真 3）。中国に定住する 56 の少数民族のうち、25 の少数民族が雲南に属しているとのこと。「人類社会の博物館」（注 14）とは言い得て妙である。民族村には各民族の象徴的な建物を模した建築物が配置されており、電気自動車で

回遊しながら、各民族の生活様式を簡単に見学できる仕組みになっている。入り口で艶やかな民族衣装を纏った7人ほどの女性が出迎えてくれる。少数民族を保護していることをアピールする施設と考えられるが、赤いネッカチーフを巻いた小学生らしい一団に出会ったことからすると、民族教育の実践の場にもなっているのかも知れない。

注1 <http://konarc.naro.affrc.go.jp/jnews/26/26p07.html>

注2 <http://yonemura.co.jp/main/oversea/yunnan/konmei/kanso.htm>

注3 中兼 和津次編著『中国農村経済と社会の変動』御茶の水書房 2002年 p.180

注4 同上 p.14

注5 巖 善平『中国農村・農業経済の転換』勁草書房 1997年 pp.31～33

注6 同上 pp.5～6

注7 加賀爪 優監修・曾 寅初著『中国農村経済の改革と経済成長』農林統計協会 2002年 p.36

注8 同上

注9 <http://www.yonemura.co.jp/main/oversea/yunnan/konmei/tonan-f.htm>

注10 同上 [konmei/tonan-f.htm](http://www.yonemura.co.jp/main/oversea/yunnan/konmei/tonan-f.htm)

注11 同上 [konmei/toukei.htm](http://www.yonemura.co.jp/main/oversea/yunnan/konmei/toukei.htm)

注12 同上

注13 同上 [konmei/kyodai.htm](http://www.yonemura.co.jp/main/oversea/yunnan/konmei/kyodai.htm)

注14 雲南大学の陸 偉東先生の講演による。



写真3